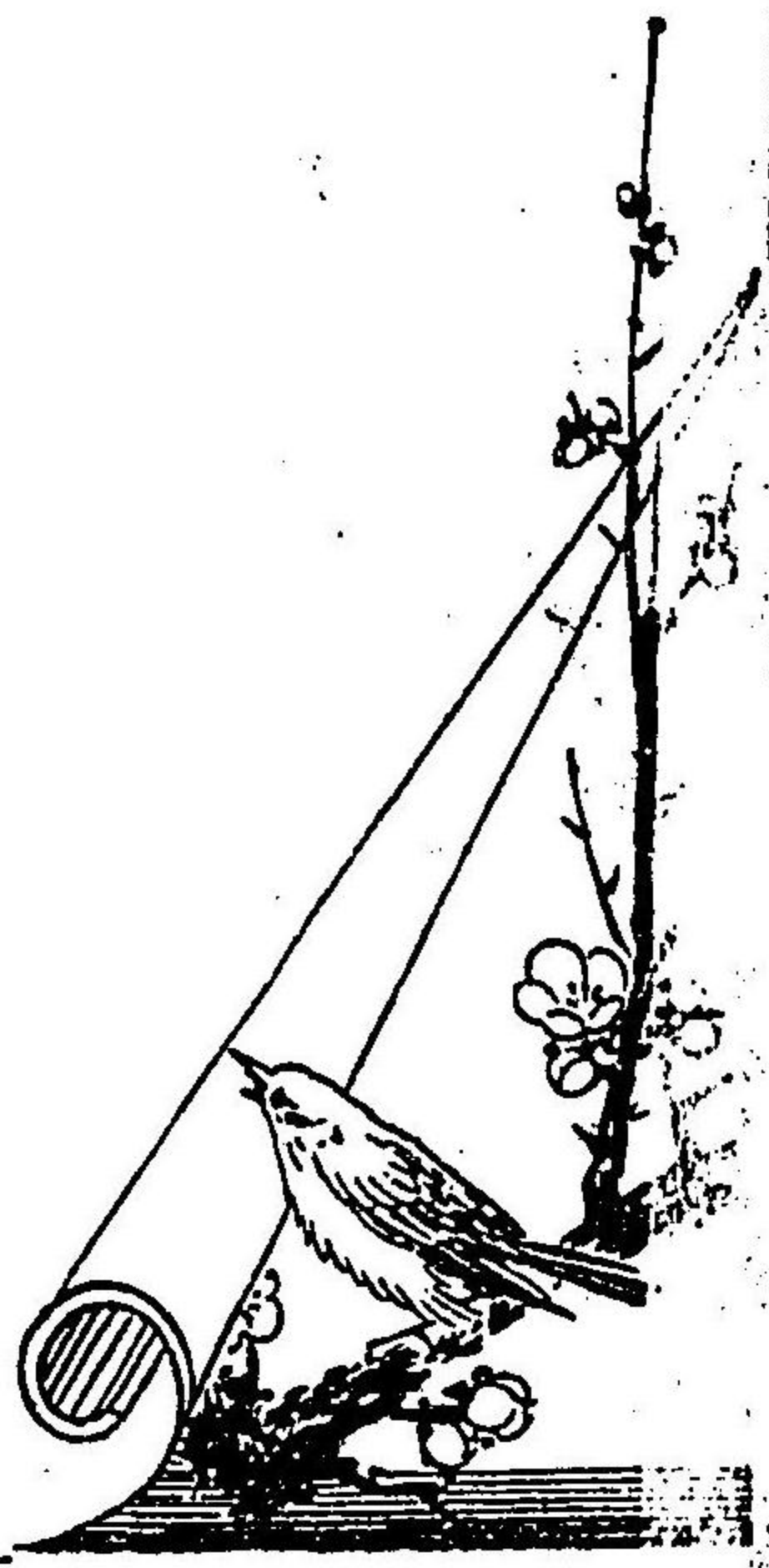
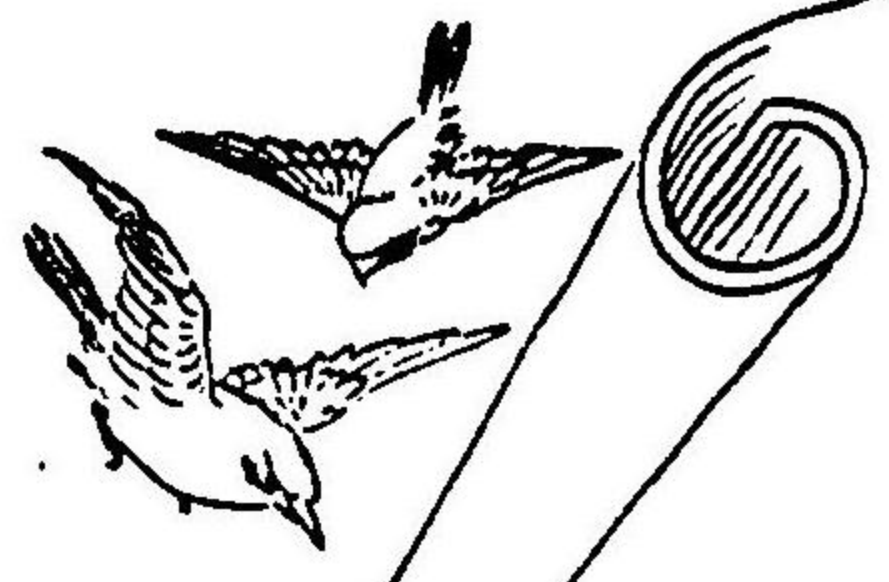
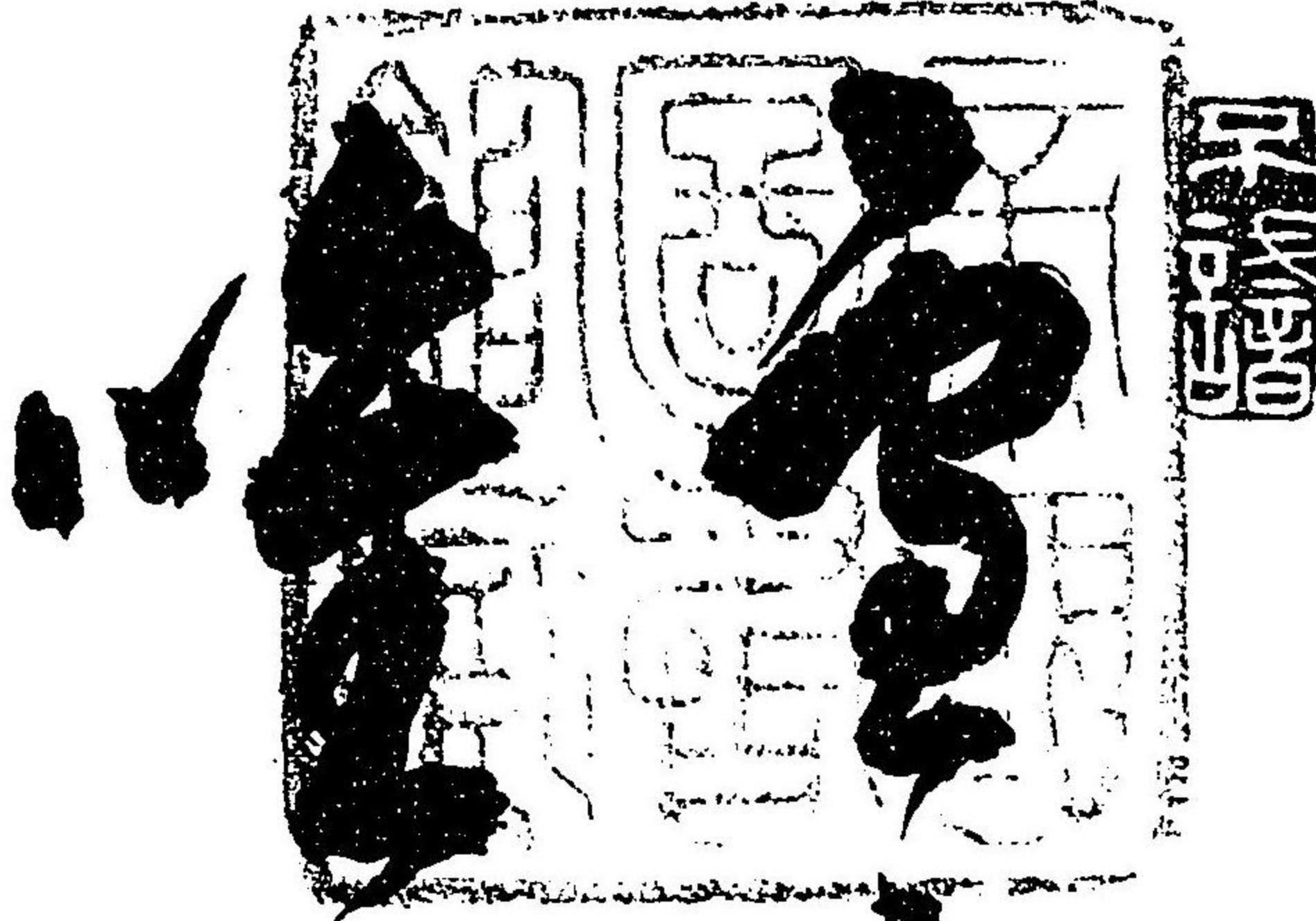


210
6

雪重衣の梅

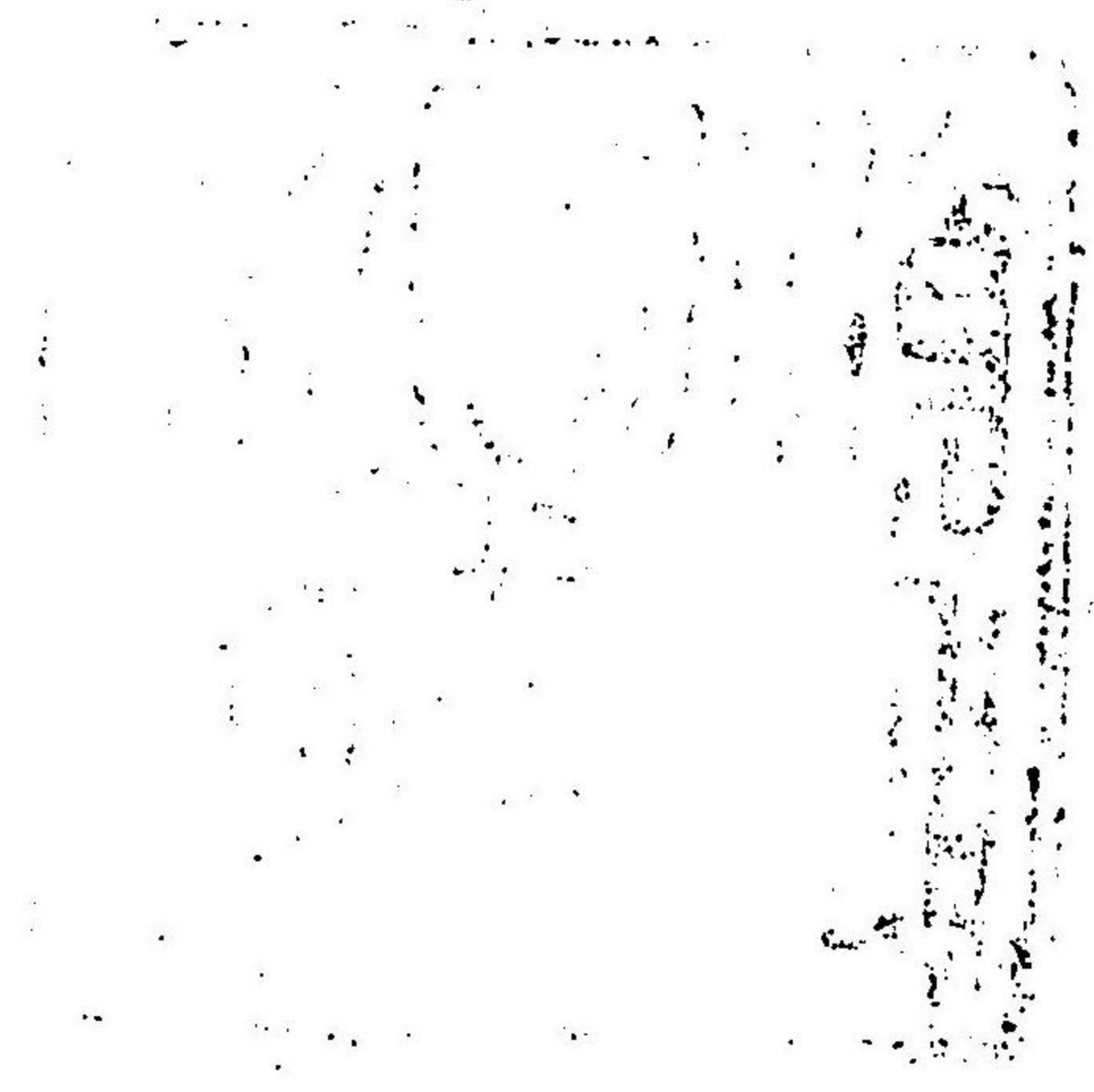


特45
26



民
華
中
華
印

表
荷
子
表



明治三十八年二月二十六日
永平傳由波



今日はわれらが高祖承陽大師御降誕の當日でありましてわれらにとりては此上なき喜びしき聖日であります仍て大師の法孫たるわれら曹洞宗青年會員一同が一堂の下に會して此日を祝ふと共に演說會を開き此の小冊子を造り以て聊か大師降誕の紀念にいたしたいと思ふのであります

明治三十六年二月二十六日

目次

承陽大師の小傳……………祥雲晩成

我が祖師……………保坂哲隆

道元禪師の性格……………孤峯智琛

承陽殿の遺音……………木村泰賢

永祖の正傳……………高田道見

我國佛教史上に於ける道元禪師の位置……………鷲尾順敬

門外漢の承陽大師……………加藤咄堂

嗚呼老梅樹……………忽滑谷快天

雪裏の梅

(一) 承陽大師の小傳

祥雲 晩成

鎌倉山の星月夜 世は此の名辭によりて我邦家の上に政治上の大變革ありしが如く、思想上にも亦一大變革ありしとを聯想せしむるを得べし、蓋し、保元平治の大亂は上下を擧げて不安の境に立たしめ、自ら厭離穢土の厭世觀に導かれつゝありし時に當りて、法然上人希世の大才を以て專修易行の念佛門を弘め、人心の要求を満たさんとしたまへり、而も是れ未だ凡ての需用に應ずる能はず其の或るものは却て台言の深邃なる教理を信せんとするものあるに至る、然れども腐敗墮落したる舊來の佛教は再び人心を收攬すると能はず、空しく天の方を望んで慨然たるもの二三にして止まざるべし、榮西禪師の如きは其の最なるものにして又成功に近きものならんか、蓋し法然榮西の二師は是れ實に鎌倉

時代に於ける佛教の雙璧とも云ふべきものありと雖も、人心の全要求を満たすべく尙は幾多の缺くる所ありたるが如し、是に於て乎、親鸞上人出で、淨土門の完成を期し、道元禪師に依りて更に佛心宗の勃興を促せり、

欽んで按ずるに、土御門院の正治二年正月久我内大臣源通親公の御三男として生れたまへるは、實に我が曹洞の高祖道元禪師にして、少くとも日本佛教史上に一大光彩を放ち、日本佛教に一大革新を興へ、七百餘年の今日、三萬の法孫、一萬四千の門葉は日本全國に基布藩衍し、一千餘萬の人民之に依て安心立命の標的を得んとするの基を開くの契機は、蓋し此の日に於て始めて渾圓球上に投せられたるあり、其の四歳にして李嶠の百詠を誦んじ、七歳にして毛詩左傳を讀みて略其の大義に通じたまへると云ふが如き、豈に既に其の群品に絶せるを示すものにあらざらんや、三歳にして父を失ひ、八歳にして母に別れ給ふや、甚く世の無常を嘆かせられ、茲に出家得道の志を決し、攝政關白基房の養て子となし、其の名爵を襲かしめんとするをも肯かず、専ら心を佛典に寄せ、

遂に十三歳の春の末竊に卿衣を脱して叡山に上り、座主公圓僧正に就きて辨道修學に怠りなきと三年、端かく本來本法性天然自性身の疑問を提けて一山の學匠を惱まし、觀心に明なりと稱する三井の公胤僧正も「我家法を傳ふと雖も事義路に涉る、若し其の理を質さんと欲せば佛心宗に問へ」の語を以て之を避け、遂に建仁の榮西禪師に投じて僅に氷釋するを得たりと、時に大師歳未だ弱冠を過ぎず、復以て其の識見高邁にして他日日本佛教に一大革新を興ふるの技倆ありたるを察すべきなり、而も幾年ならずして西禪師は示寂せられたれば、遂に貞應二年御年二十四歳にして榮西の高足明全和尚と共に宋に渡り、天童山に上りて無際禪師に參せらる、熱烈氣銳學道を以て生命とするにあらざるよりは焉か能く斯の如くなるを得んや、然るに當時の支那僧我邦人を卑しむ法臘の序を亂して常に彼等の末席に座せしめられたれば、大師大に其の不法を憤り、時の天子寧宗皇帝に上表すると三度、遂に詔勅を以て四百餘州の僧次を正すに至れり、大師の心中唯だ一の佛法あるのみ、復何ぞ國の大小華陬わらんや、居ると二年更に笈

を負ふて諸方に行脚し、普く師を尋ね道を訪ひたまひしも良師を得ず、再び錫を天童に廻したる時、無際禪師既に化を他界に遷し、明全和尚亦旅窓一片の煙と化し去りたれば、愈々志を決して歸朝せんとし給へるに、天童山の現董如淨禪師こそ眞に天下の名僧なれと告ぐるものありければ、直に參じて其の爐轡に投じ、茲に始めて身心脱落し、佛祖正傳の大法を傳受し給へり、蓋し奈良平安以來の佛教徒を罵倒して

但我國には昔より正師未だあらず、何を以てか之が然ることを知るや、言を見て察するなり、流れを汲みて源を討ぬるが如し、我朝古來諸師の編集したる書籍に、弟子を訓へ人天に施すに、其言是青くして其語未だ熟せず、未だ學地の頂に至らず、何ぞ證階の邊に及ばんや、只文言を傳へて名字を誦せしめ、日夜他の寶を數へて自ら半錢の分なし、古の責之に在り、或は人をして心外の正覺を求めしめ、或は他土の往生を願はしむ、惑亂之より起り、邪念之を職とす、

と喝破し、更に不立文字の新佛教を鼓吹し給へるもの、豈に此間の大悟界より迸出したるものにあらざらんや、後二年安貞元年に歸朝したまひ、先づ洛の建仁に錫を止め、後、深章の安養院に移り、遂に興聖寺を宇治に建て始めて開堂の式を行ひ佛祖正傳の宗風を擧揚せらる、此間に吾人遠孫の舟筏たるべき學道用心集、普觀坐禪儀、正法眼藏、典座教訓、衆寮清規等あり、其諄々として弟子を接得する所、六百餘年後の吾人法孫をして、親しく其の警咳に接するの思あらしむるものあり、徳風上下に遍ねく、化儀四方に及び、天下の道俗蔚然として其の座下を集るに至りしも亦怪むに足らず、

後波多野義重、越前の山奥に幽邃の地を擇で一宇を建立し、以て大師を請す大師其の城邑聚洛に遠かれるを喜び、乃ち錫を移して永住轉法輪の道場と定め給ひぬ、是れ實に今の曹洞宗大本山永平寺なり、後寶治元年鎌倉の執權北條時頼の請に應じて東下せられたるとあるも、機契はず、一年餘にして歸錫したまへり、時頼其の道風を慕ひ、三千石の寺領を寄附したるも拒で受けず、却て其

の墨附を受け歸りたる玄明を放逐し、其床下の土を去ると七尺なりきと云ふ、
徳名遂に九重の奥に達し、時の天子後嵯峨天皇より紫衣を賜はりたるも固く之
を辭し、再三に及びて僅に之を受け給ふと雖も、詩を賦して終身身に著けず、
専ら形式を離れて真個の衲僧を打出するに勉められ、威武に屈せず、名門に媚
びず、後世或は曹洞土民の蔑辭を冠するに至るまでに王侯貴人の親近を却け、
榮西禪師の臨濟禪の上に數涉を加へたる曹洞禪の擧揚に全身を捧げ、天台眞言
の舊佛教を罵倒し、親鸞日蓮の新佛教に瞞せられず、直に靈山會上の遺囑に依
り、達磨西來の道風を辱しめず、鎌倉佛教の大成を告げられたる大師の高風越
格は、吾人雌黃の豈に能く盡し得べき所ならんや、建長五年八月二十八日を以
て嗑焉として大寂定中に歸り給ひぬ、御歳五十四、遺偈あり、曰く

五十四年 照第一天

打箇跏跳 觸破六千 嘆

渾身無覺 活陷黃泉

(二) 我が祖師

保坂哲隆

教界の天地沃雲漢々、世を濟ふべき十万の法師は、權門に媚び富貴に阿り、
名利に走せ私欲に趨り、腐敗せる世俗と共に滔々墮落の淵に沈む、吾人は此時
に當りて眞摯誠實絶えて權勢に依らず名門に阿らず、眞に佛法のために佛法を
修し玉へる高祖承陽大師を想慕するの情轉だ切あるを覺う、大師示して曰く
行者自身の爲めに佛教を修すべからず、靈驗を得んが爲めに佛法を修すべか
らず、果報を得んが爲めに佛法を修すべからず、唯佛教の爲めに佛法を修す
べきあり、即ち是れ道なり」

と之れ光烈眞摯なる偉人、高祖大師によりて始めて聞くを得べく而して亦大師
五十餘年の生涯を窺ふに餘りあるべし、只佛法の爲めに佛法を修す、廟堂に立
ちて天下の大政を議する、茅簍を取りて交易を營む、鋤鋤を肩にして田野に排

転する、一念是に到らば皆佛作佛行にあらずや、何にももの愚を習ふてか加持して靈験を求め、祈禱して果報を願はん、世の長壽を願ふ人よ、不死の薬は變轉極りなき此の世の中に存すると知らずや、世の財寶を求め幸福を希ふものよ、來りて宇宙無限の寶庫を開け、必ず受用不盡なるものありて存せん、世の安樂を願ふものよ、來りて大師の教へに従ひ正しき生涯を送れ。

吾れ常に大師の尊像を拜して優柔温和なる緇衣の一老僧にましますを感せり然かも六百五拾年の昔、佛祖正傳の大法を傳へて、傘松の峯高き處に新佛教の旗幟を翻し、超然天下を睥睨して凡僧を叱咤し、吾國の佛教に生命を與へ面目を一新せしめ玉へる銳氣凜烈なる一大偉人ありしなり、大師一たび大寂定中の人とあり玉ひてより、今や六百五十年傘松峯頭の月永へに長夜の暗を照し、永平の流れ長く法界の衆生を濕す、吾等兒孫永平の流れを酌むもの焉ぞ欽仰の念に禁んや、

大師の佛法は文字にあらず言句にあらざるなり、直指の大道を示して直下に

自己奥裡の主人公に承當せしめ、吾人をして古今の佛祖と暖き呼吸を通せしむる微妙の法門なり、大師示して曰く

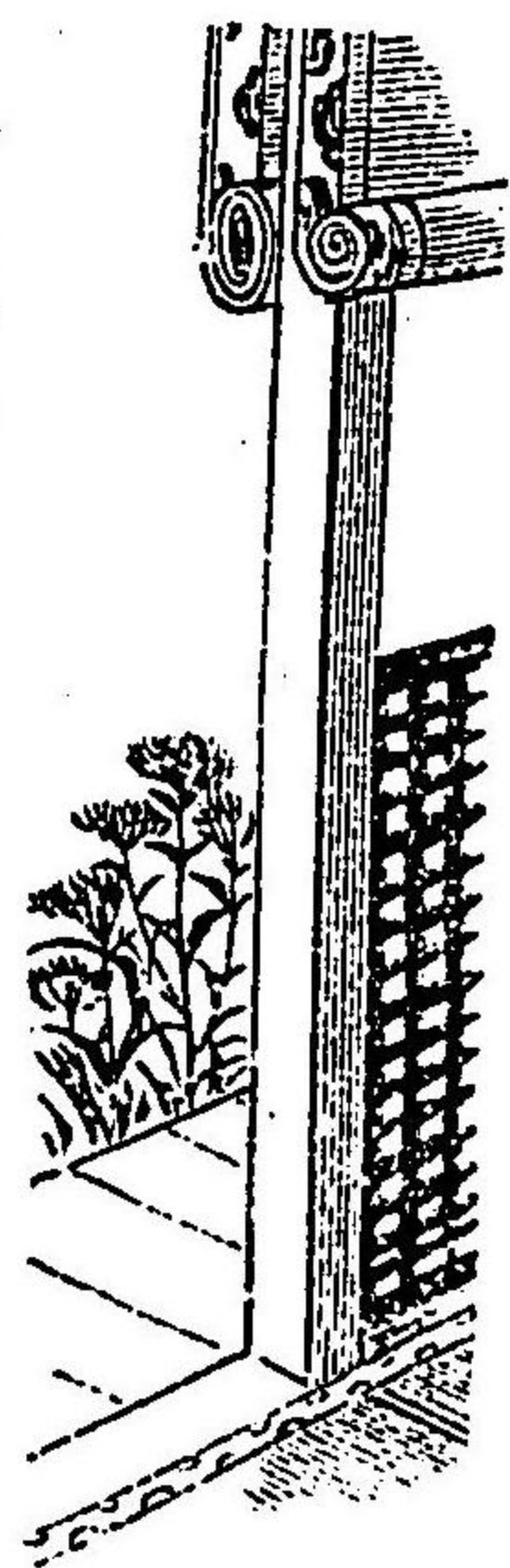
只是等閑に天童先師に見えて、直下に眼横鼻直あるを認得して人に瞞せられず、空手にして郷に還る故に一毫の佛法あるなし、日は朝々東より出で月は夜々西に沈む」

と佛法は物にあらず與ふべからず、取るべからず若し夫れ眞の佛法を會せんと欲せば須く文字言句の外に求めよ、雨竹風松常に微妙の法門を語り、溪聲山色絶えず無量の經卷を讀誦するにあらずや、文字以外、理屈以外、心を沈めて直ちに物其物を見、聲其物を聞く時、豁然として會する所あるもの之れ何物ぞ、

大師は中正穩健なる宗教家なりき、眞摯光烈なる偉人なりき、權勢富貴、名聞利養、之れ大師の最も厭ひ玉ふ所なり、勢に依らず力を憑ます超然として塵俗の巷を離れ、寂寞たる深章の里、雪白き吉峰の邊り、心を水雲に寄せ身を風月に和して正傳の大法を顯揚せられぬ、其玲瓏玉の如き生涯、清高純潔なる家風、

之を仰げば彌々高し、

今や佛日西に傾き、法燈影滅明、世は皆闇黒の境に彷徨ひ、求道の聲四方に聞へて、偉人の出現を望むと彌々切なり、然れども止めよ、徒らに天の一方を望むを、他の一角を眺むるを、偉人は天の一方より來らず、地の一角より生ぜず、知らずや一大偉人は常に汝等が腦裡に宿り玉ふを、之を知らざるは狂へる人なり、之を見ざるは迷へる人なり、希くは遠く古に溯らずして當面に大師の尊影を拜せんか。



(三) 道元禪師の性格

孤 峯 智 燦

木枯枯野にそぶき、霞戶外にたばしる頃、破窓の下、靜かに上下一千三百有

余歳に洩れる、日本佛教史を繕きて、吾人が最も多大の、興味と、趣味とを感ずるは、即ち星月夜鎌倉の御代なりとす、然り鎌倉時代は實に我が教界は多くの傑士を出しぬ、然れども超然として千歳の下、尙ほ人をして崇仰、敬慕の念に堪へざらしむるもの果して幾人かある。

源空、榮西、親鸞、日蓮等、若し精細に此れを檢すれば、渠等の性行中固より吾人の摸範として仰ぐに足るものあらん、然れども要するに渠等は一種の天才のみ、未だ以て偉人と稱すからざるなり、若し夫れ渠等の性格を觀來れい、源空と親鸞とは春風の洋々たるに似て、榮西と日蓮とは烈日の炎々たるが如し、源空、親鸞を以て慈母に比すべくんば、榮西、日蓮は恰も嚴父の如けん、是れを地象に喩ふれい源空、親鸞は死せる海洋の如く、茫々たる曠野の如く然り、而して榮西、日蓮は百雷の一時に轟く大瀑の如く、怒濤澎湃する荒海の如し、源空、親鸞は慈愛の人、榮西、日蓮は精神の人なり、然れども想へ、風無きに浪を起し、事なきに恆に憤る、精神に勝ちたる人は危い哉、慈愛はよし、然れ

とも想へ、嚴父なきの兒は其性格に於て、決して圓滿なる能はざるとを、故に云ふ、榮西、日蓮に學ぶ者は往々にして剛復悖戾とあり、源空、親鸞に學ぶの徒は多く柔弱怯懦に流るゝなりと。

然るに獨り我が道元禪師に至ては、此等の諸性格を調和融合し、渾然として大成したるものなり、此れ吾人が獨り道元禪師を喚んで偉人と云ふ所以なり、禪師の性格は餘りに寛宏雄大あり、其常識に於て殆んど進歩の頂點に達せり、餘りに偉大なるものは終に平凡たるを免れず、否、平凡ある我等には平凡の如く見えて然らざるものあり、禪師の如き即ち其一人なり、見よ、一種の異彩あり、着色あるものは世に顯はるゝと著しきものなり、然れども全く偉大なる者は着色なく、異彩なくして、併も尙ほ不知不識の間に衆人を感化するの力あり、顯著ならざる替りに遠大あり、一時的ならざる替りに永久なり、禪師の如きは自ら英名令聞を避けんとして、春雨しめやかに降る深草の里に、跡を晦すも雖ども、桃李言はずして自ら露をなしき、自ら立教開宗を厭ふて、山深き志比

の奥、形を白雲の裡に没するも、雲納雲の如く集へき、自ら僧官を需め（榮西の如く）ざるも、紫衣を強賜せらるゝに臻れり、嗚呼道元禪師の性行は秋霜の如く氣高く、秋天の如く清く、白雪の皚々たるが如く潔く、實に八面玲瓏たる芙蓉峰の如き慨あり。

憤るべき時に當て、憤らざる此れを儒夫と云ふ、慈悲仁愛は宗教家の恆に保つべき所なりと雖ども、此れを施すに時處位を撰ばずんば、終に人の子を傷つるとなしとせず、又終に其自身懦夫の毀りを免れざるべし、此れ決して充全なる性格の人と云ふ能はざるなり、天涯万里孤り異域に客となり、邊國の野人を以て侮蔑せられ、新戒の位次に列せらる、春風の駘蕩たるが如き禪師と雖ども又厲然として憤らざるを得んや、於茲乎、三度上表して之れを帝に訴ひ、以て僧臘の濫弊を矯正し、亦た其徒玄明が時頼の寄進狀を齎し得々として來るや、之れを叱責して措かず、遂に法衣を褫奪して退山せしめ、其が狀下の土を鑿除すると七尺に及べりと、何んぞ其高潔あるや、何んぞ其熱烈の氣に富めるや、

今の權門に媚ひ、富者に阿るの徒、正に慚死して可なり、わい禪師が厲聲一番事に臨んで憤る時は、恰も迅雷雲を破て、天轟き、地震ひ、懦夫をして奮然として起たしむるの概あり。

頭腦明哲、冷靜にして智に富み、併も自信あり、勇氣あり、意志に富めると我禪師の如きは、日本の佛教史上多く其比を見ざる所あり。故に禪師が遺著中

此れが證據とするに足るもの頗る多し、就中、女性に關する見解の如き、卓爾として古今に獨歩するものあり

佛法ヲ修行シ、佛法ヲ道取センハ、タトヒ七歳ノ女流ナリトモ、スナハチ四衆ノ道師ナリ衆生ノ慈父ナリ、………マタイマ至愚ハ、ハナハダシキ人オモフコトハ、女流ハ貪婬所對ノ境界ニテアリトオモフコ、ロヲアラタメズシテコレヲミル、佛子カクノゴトクアルバカラズ、貪婬所對ノ境トナリヌベシトテ、イムコトアラバ、一切男子モ、マタイムベキカ、………マタナガク女人ヲミジト願セハ、衆生無邊誓願

度ハトキモ女人ヲハスツヘキカ、

と、尙ほ禪師は斯かる明哲なる頭腦もて、當時の舊佛教徒間に盛行したる、彼の結界を難じ、痛快なる筆もて之れを罵倒せられき、

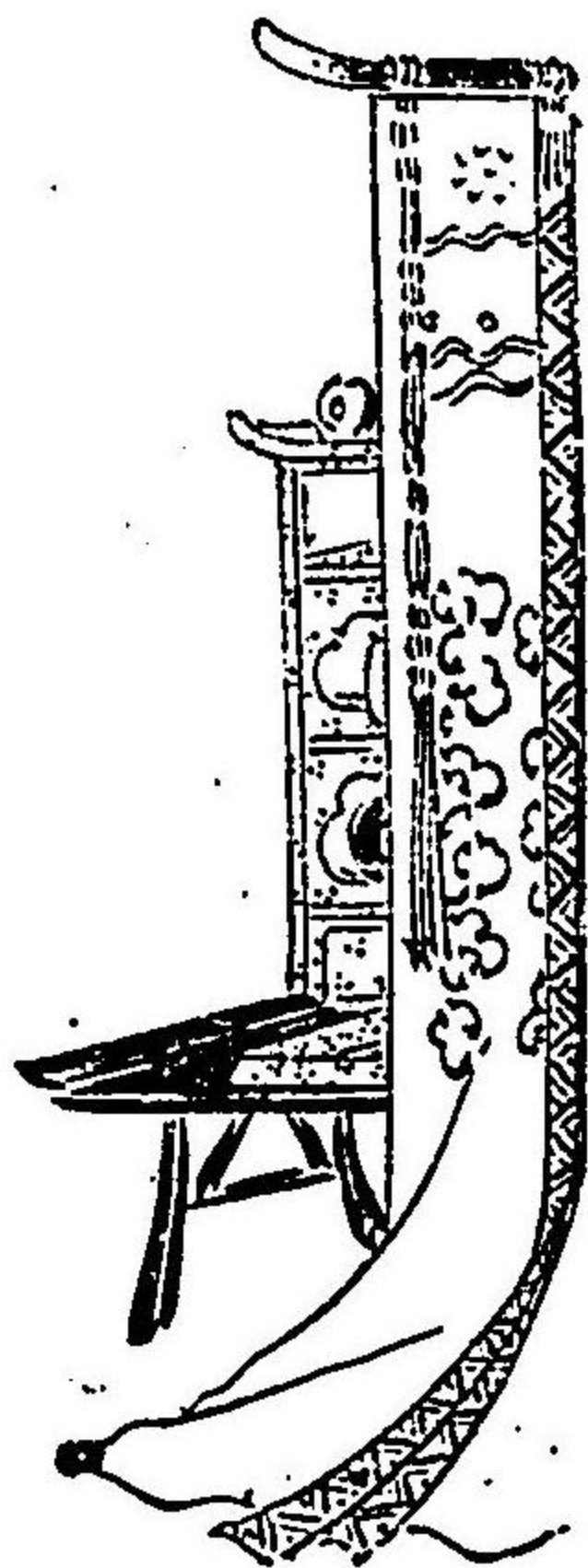
マタ日本國ニヒトツノワラヒコトアリ、イハユルアルヒハ結界ノ境地ト稱シ、アルヒハ大乘ノ道場ト稱シテ、比丘尼女人等ヲ來入セシメス、邪風ヒサシクツタハレテ人ヲキマフルコトナシ、稽古ノ人アラタメス、博達ノ士モカンカフルコトナシ、アルヒハ權者ノ所爲ト稱シ、アルヒハ古先ノ遺風ト號シテ、更ニ論スルコトナキ、ワラハ、人ノ傷モタエヌヘシ

と、其の識見の高邁なる洵に驚くの外なし、六百五十餘年前、我道元禪師が斯くまでに論評し、罵倒せられたるにも關はらず、尙ほ依然として此の惡弊は高野、比叡の一方に墨守せられつゝあるに非ずや、最澄、空海は共に一代の偉物なり、然れども尙ほ數千歳の下、斯かる失點を残せしに非ずや、我禪師の如きは實に心を静けき高遠の境に馳せ、手を人事の低きに下し玉ふ者と云ふべし、宗

教家の本領實に茲にあり、吾人法孫たるもの勗めて學ばざるべけんや、

世人稍もすれば則ち云ふ、道元禪師は親鸞、日蓮に比して少しく慈悲の歆如たるものありと、此れ未だ禪師を知らざる者の言のみ、未だ禪師を學せざるもの言のみ、若し夫れ深く禪師を研鑽せんか、此の種の疑問は倏忽として氷解せられん、禪師が駕を鎌倉に移し、北條時頼を接化せられしが如き、又越前の山奥に波多野氏を行化せられしが如き、其他禪師か鎮西、鎌倉、京師等の俗弟子の爲めに特に書を裁して、書簡傳道をなされしが如き、透底枚舉に堪へざるなり、特に門弟の接化に全力を傾注せられしが如きは、他宗祖の遠く及ばざる所とす、故に一たび禪師の溫容に接するものは、恆に氳氳たる春風のうちに包まるゝの感あり、否、禪師の名を聞くだにも、靄然としてほゝるみ、東風の習々として山笑ひ、水和らぐるの想あり、あゝ大なる哉、禪師の性格、あゝ高潔なる哉、禪師の性行、禪師逝いて六百五十余年、尙ほ禪師の御名を聞く者をして靄然としてほゝるまじめ、其高風逸格を聞くものをして、肅然として襟を正

さしめ、其遺書を拜覽するものをして、奮然として起たしむ、惟ふに禪師の性格は余りに偉大にして捕捉するに難しと雖ども、若し今此れを抽象的に列舉せば、禪師は極めて謹嚴の人なりき、大膽の人なりき、野心なき人なりき、理性に富み、感情に厚き人なりき、自信あり、勇氣あり、熱誠あり、而して悲智圓滿の人なりき、換言すれば常識の及ぶたけ發達せし人なりき、従て尊く、畏こく、慕はしき人なりき、此れ吾人が此人を以て獨り偉人と喚ぶ所以にして、昔時諦忍律師が吾人に先つて「各宗の祖師として餘りあるは唯永平高祖一人あるのみ」と賞ひ、且つ證明せし所とす、吾人法孫たるもの仰いで讚嘆せざるべけんや。



(四) 承陽殿の福音

木村 泰賢

梅の裏雪

◎浄樂無爲の都を離れて五濁惡世に彷徨し、長者眞父の家珍を捨て、他國踰避の窮子とある、憐むべし、人の子は長へに佛陀無限の光明裡にありて、却て暗きより冥きに迷ひ遂にその歸趣を忘るゝに至る、後を顧みれば生、前を望めば死、生何者ぞ死何者ぞ、人は何處より來り何處にか去る、何人が爲めに生れ何人が爲めに死す、人茲に迷ひ人茲に惱む、あはれ無常變遷定めなき世に、石火電光にも似たらん榮華を求めんが爲めに、限りなき慾望の影を遂ふて心をあやまし身を苦め、罪を作り惡を重ね、倏忽として死する人類の運命はいかに悲しきものなるよ、此身今生に度せずんば更に何れの時をか待たん、徒らに利慾の奴隸とありて一生の大事を忘るゝ勿れ、朝に道を聞いて夕に死するも可なり、自己の解決未だ成らずして百年の壽命を持つとも畢竟何の詮がある

梅の裏雪

我等の父なる佛陀は解決の理を見出し玉へり、我等の母ある大師は救濟の道を講し玉へり、佛陀は世相即實相、生死即涅槃の理を証得し玉へり、大師は心身落脱脱落心身の旨に体達し玉へり、暗きに迷ふものは來りて佛陀の光明を仰げ、人世の重荷に惱めるものは來りて慰安を大師に得よ、幸福を求めんとするものは來りて不盡の福ひを佛陀に得よ、生死の疑惑に泣く者は來りて解決を大師に得よ、病める者、飢ゑる者、智あるもの、智なき者、等しく來りて承陽殿に佛陀の福音を聞け、

◎病めるものは藥養を要し、疲れたるものは休息を要す、佛陀は大醫王なり、大師は大安藥の主なり、能く我等の心病を療し能く我等の神疲を治し玉ふ、悲哉我等は無始の昔より無常に病み名利に疾れ、惠命を損し聖体を害して尙ほ之を悟らず、常に意馬心猿を逞ふして益々其疲病を重からしめつゝあるなり、佛陀に歸し大師に投せんとするものは先づその自ら病み疲れつゝあるを知らざるべからず、自ら疲病しつゝあるを知るは佛法に入る初門なり、知らずや慈父釋

尊は儲君に生れ玉ひしも榮花の頼むに足らざるを觀じ玉ふや、之を捨つる弊履の如くし玉ひ、愛母元大師は公郷に生れ玉ひしも無常の犯すべからざるを知り玉ふや之を棄て、復た願み玉はざりしを、誠や身大患に罹る時富貴も名譽も亦何の用をかゝす、但た單へに名醫の治を仰くあるのみならずや、身病已に然らば心病曷不然らざらん、智慧ある人よ、靈たまひの全きを希ふの士よ、何ぞ早く承陽殿の福音を聞いて佛法に投せざる、刻一刻我等の靈魂は腐爛しつゝを忘るべからず

◎身に病める者は其輕重を問はず、必ず良醫の教を受けて服藥攝生して癒ゆるを得るが如く、心の病も亦然かなり、信法頓漸の異ありありと雖も一に大醫王の教勅に隨ひ承陽殿の福音に則て已見私情を交へず專念に行持修習して初めてその病を除くを得るあり、大醫王の教勅に隨て行持修習するは他なし、能く日々の生命を等閑にせず十二時中を使役するにあり、一生は百歳に成り、一歳は十二ヶ月に成り、一月は三十日に成る、此一日の行持豈に輕すべけんや、我等

◎一日の行持は是れ佛陀の種子なり、我等一日の行持によりて佛陀の大道通達するなり、生くること僅か一日なりとも佛陀の機を會せば曠劫の多生にも換え難き好日ならずや、徒らに祿々として百歳生けらんは恨むべき日月なり悲むべき形骸なり、古來の偉人傑士一日の工夫を徒らにせざる旨夢寢にも忘るゝ勿れ◎求めよさらば與へられん、叩けよさらば開かれん、求めて與へられざるはなく、叩いて開かれざるはあし、日々の行持は求むるにあり、時々の修練は叩くにあり、墻壁にも求めよ、露柱にも叩け、田裏にも求めよ、里中にも叩け、聞かすや承陽殿の福音を、諸佛の正位いかでかまことに感應するあはれみながらん、土石沙磧にも誠感の至神はあるなりと、肅々たる雨夜にも白壁に對して叩け、遅々たる花日にも明窓下に坐して求めよ

◎信仰は事實なり、佛法の生命は信仰にあり、白仍頭上に下るも黄白眼前に散するも我が信仰をばそれいかにすべきぞ、我等承陽殿の福音に皈する時此覺悟なかるべからず、痛しい哉今の世の人は心と道と遠ふして遠し、假ひ非道と知

るも人之を賞翫すれば之を修し、假ひ正道ありとも人之を讚嘆せずんば捨て、願みず、適々信者とありて佛法を會せるに似たるも、却て之を以て名利のかけ橋となし生活のたつきとするもの、み多し、大師誠めて曰く、佛法修行は自身の爲めにせじ、他人の爲めにせじ、但だ佛法の爲めに佛法を修すべきなりと大師はその一生を通してたゞ佛法の爲めに佛法を修せられたる縦跡を欣慕すべし信仰の前には利害得失を顧みることなかれ

◎佛法廣しと雖も販する處端坐參禪に外ならず、自受用三昧の遊化は偏へに之を以て正門となす、濫りに三千三諦を唱へ、濫りに一念不生と稱す、自己の安心立命には何の資する處かある、吾人は病みて解剖學を聞かんとするものにあらず、藥物學の講義を欲するものにあらず、直ちに良藥そのものを求む、佛法の教理を聞き、經典の判釋を知るも吾人の心病は遂に癒えざるなり、參禪學道は良藥そのものなり、佛法それ自身なり、燕石を抱いて珠とする勿れ、魚目を執して玉とする勿れ、直ちに佛法の中堅を衝いて參禪辨道せよ、聞けや大師の

福音を、念佛修懺看經禮拜を用ひず祇管に打坐せよと、學者來れ愚者來れ、國王來れ非人來れ、此法は學解地位の關る處にあらず

◎參禪學道は一生の大事なり、人類最大の法樂地なり、卒爾にして可ならんや古人の臂を斷ち、岩を枕として之に志すもの所以なきにあらず、今の人は餘りに懶弱なり、餘りに濫墮なり、自己本來の面目を解決するに易行を以てせん、易ぞ能く寶所に達するを得ん、大師曰く、もし少しにても身を重くする、と法に過ぎなば佛道必ず會せず、と安心立命を得んとするものは粉骨碎身をも辭せざるの信念をかかへからず

◎若しそれ、參禪の究意本地の風光に至りては、我等拙き筆を以て之を描かんと恐れ多ければ、且く大師の御垂示を抄録せんか

諸佛如來ともに妙法を單傳して阿耨菩提(無上正等覺)を証するに最上無爲の妙法あり、これたゞはとけ佛にさつてよこしまなることなきは、自受用三昧その標準なり、この三昧に遊化するに端坐參禪を正門とせり、この法は人

々分上にゆたかに具れど雖も、いまた修せざるにはあらはれず、証せざるには得ることなし、放ては手にみたり、多のきはならんや、語れば口にみつ縦横きはまりなし、諸佛の此中に住持たる各々の方面に知覺をのこさず、群生のとこしなへにこの中に使用する各々の知覺に方面あらはれず、いまま教ふる功夫辨道は証上に万法をあらしめ、出路に一如を行するなり、その超關脱落の時この節目に關らんや、(中畧)もし人一時なりといふとも三業に佛印を表し、三昧に端坐する時、遍法界皆佛印となり、盡虚空悉くさとりとなる、ゆるに諸佛始來をしては本地の法樂をまし覺道の莊嚴をあらたにす、およそ十方法界三途六道の郡類みな共に一時に心身明淨にして大解脱地を証し、本來面目現前する時、諸法みな正覺を證會し、萬物共に佛身を使用して、すみやかに証會の邊際を一超して、覺王樹に端坐し、一時に無等々の大法輪を轉し、究竟無爲の深般者を開演す、(中畧)自受用三昧の境界あるをもて、一塵を動かさず一相を破らず、廣大の佛事甚深微妙の佛化をなす、この化道のおよふ

ところの草木土地、ともに大光明を放ち深妙法を説くこときはまる時なし、

(下畧)

◎溪の流は廣長吉を奮ひ、山色の青きは毘盧法身の相を現す、自己元來道中にありて妄想なく顛倒なし、本來本法性天然自性心、何れの處にか塵埃ある、此堅き信念を有して証上の修を行するを參禪學道の出立點となす、然れども若し祇管に証所悟邊に滯らば、亦向上の死漢となりて却て自由の分なし、更に退歩踰越して証跡を亡じ佛邊を離れ自己を空するの力用なかるべからず、所謂脱落身心心脱落之れなり、佛道の好風流茲にありて存す、佛界に遊びて佛に縛せられず、人界に處して人事に溺れず、世法は凡て佛法となり、佛法直ちに世法とある、人類の本懷此に至りて、初めて確立し、社會の存在此に至りて初めて意味を有し來る、而して不死の生命亦之に外ならず

◎あゝ釋尊逝いて茲に二千八百五十二年、大師誕れて茲に七百〇五年、正法眼藏沙界に遍く皮肉骨髓今尚ほ暖なり、我等幸に太平の聖代に生れて此法味に濕

ふ、歡喜述べ難し、冀くは一切衆生と手を携へて、靈鷲の峯に變らぬ月影をたづね、永平の流に盡きぬ靈泉を酌まんかな、承陽殿の福音に佛陀の光明に接せよ、

(五) 永祖の正傳

高田 道見

予は平素専ら主義を通佛敎に取り、敢て自から宗旨の深淺祖師の優劣を品評するが如きことを爲さず、また固より小根薄識にして是くの如き伎倆を有するものにあらず、苟くも初心晩學の身を以て輕々に千古の偉人を抑揚するが如きは増上慢の甚しきものなりと深く自から誠むるもの也、然るに此頃曹洞宗青年會の諸士、相謀りて永祖の降誕會を嚴修し、因みに施本の善事を舉行せらるゝに際し、一言を予に求めらるゝの光榮を辱うす、仍て辱劣を省みず予が永祖に對する所信の萬一を記して轉大人法輪の微意を表す

永祖幼年初めて發心出家したまひし時は、たゞ佛法の幽玄微妙なることを信じたまふの概念のみありて、未だ諸宗の雌雄を辨じたまはざりき、故に且く因縁にまかせて天台宗に入りたまへり、而して先入主となるは常識の免かれ難き所なるにも拘らず、天台の敎觀にあき足らずして千光禪師の室に入り、明全和尚の左右に侍して、臨濟の宗風を聽きたまふこと九回の星霜を経歷したまへども未だ以て満足したまはず、全和尚と俱に入宋求法の大願を發したまへり、當時已に俱舍唯識三論成實の經論弘まらざるにあらず、華嚴天台眞言淨土の法門開けざるにあらず、故に永祖出家以後十餘年の長時間に於て、道を諸師に訪ひ、法を諸宗に學び、經を大藏に探りたまひしことは明白なる事實あり、然るに未だ安心立脚の地を本邦在來の佛敎に求めたまはず、遙に明師宗匠を異邦に求めんとせられしは何ぞや、これ大に着眼すべき要點ならずとせず、若し夫れ當時正師の本邦に在り、正法の正傳あるに於ては、何ぞ煩しく海外萬里の他郷に渡航したまふの要あらん、それとも本邦在來の佛敎は妙なるも、その極妙を傳

ふるの師に乏かりしか、さもあらばあれ永祖入宋の初め、知識を江西湖南の兩浙に訪ひ家風を達磨門下の五門に聽きたまひたれど、當時惜い哉一個も師侍するの明師をかりしが、終に天童山如淨禪師に參見して、一生參學の大事を了畢したまへり、その淨禪師に參見したまふの初め、聞法の志願を自盡して淨禪師に奉呈したまふ、其文に曰く

道元幼年ヨリ菩提心ヲ發シ、本國ニ在テ道ヲ諸師ニ訪ヒ、聯カ因果ノ所由ヲ識ル、然モ是ノ如クナリト雖未タ佛法僧ノ實歸ヲ明メス、徒ニ名相ノ懷慄ニ滯ル、後ニ千光禪師ノ室ニ入り、初テ臨濟ノ宗風ヲ聞ク、今全法師ニ隨テ炎宋ニ入ル、航海萬里幼身ヲ波濤ニ任セテ、遂ニ和尚ノ法席ニ投スルコトヲ得タリ、蓋ノ宿福シ慶幸也云々

祖の謂ゆる佛法僧の實歸とは何ぞや、あらゆる佛教は三寶に外ならず、然るに本邦古來の祖師は未だその實歸を相傳せざりしか、之を相傳するも不幸にしてその正師に會ひたまはざりしか、祖は已に本國に在りて名相の佛法を研鑽し、

因果の理法を識得し、臨濟の禪風を聞き、兩浙五門の知識に參見して禪教二法の論議に博通せられたれども、未だ三寶を明らめざるがため、自からりの誠を投じて實歸の如何んを求めたまへり、爾しより三年の歳月に於て眞訣を稟受し實歸を明知し、正脈を相承して歸朝したまへり、今や永祖入滅六百五十一年の霜華を閱して、その溫顔に接すること能はざれども、祖師の遺身舍利は今尙暖かにして光彩の燦爛たるを見る、されば茲に少しくその片々を分與する事とせん (原漢文)

古人云ク、發心正シカラザレバ萬行空ク施スト、誠ナル哉此言、行道ハ導師ノ正ト邪トニ依ル可シ、機ハ良材ノ如ク、師ハ工匠ニ似タリ、縦ヒ良材タリト雖モ、良工ヲ得ザレバ奇麗未タ彰ハレズ、縦ヒ曲木タリト雖モ、若シ好手ニ遇ハ、妙功忽チ現ズ、師ノ正邪ニ隨テ悟リノ僞ト眞ト有リ、之ヲ以テ曉ル可シ、但タ我國ハ昔ヨリ正師未タ在ラズ、何ヲ以テカ之ガ然ルコトヲ知ルヤ言ヲ見テ察スル也、流ヲ酌テ源ヲ討ヌルガ如シ、我が朝古來諸師ノ篇集書籍

ハ弟子ニ教ヘ人天ニ施ス、其言是レ青シテ其語未タ熟セス、未タ學地ノ頂キニ到ラズ、何ゾ證階ノ邊ニ及バン、只文言ヲ傳ヘテ名字ヲ誦マシメ、日夜他ノ寶ヲ數ヘテ自カラ半錢ノ分ナシ、古ノ責メ之ニ在リ、或ハ人ヲシテ心外ノ正覺ヲ求メシメ、或ハ人ヲシテ他土ノ往生ヲ願ハシム、惑亂此ヨリ起リ邪念此ヲ職トス、縦ヒ良藥ヲ與フト雖モ、銷方ヲ教ヘザレバ病ト作ルコト、毒ヲ服スルヨリモ甚シ、我朝ニ古ヨリ良藥ヲ與フルノ人無キガ如ク、藥毒ヲ銷スルノ師未ダ在ラズ、是ヲ以テ生病除キ難ク老死何ゾ免カレン、皆是レ師ノ咎ナリ、全ク機ノ咎ニ非ズ、所以ハ者何ン、人ノ師タル者、人ヲシテ本ヲ捨テ末ヲ逐ハシメテ然ラシムルナリ、自解未ダ立セザル以前ニ偏ニ己我ノ心ヲ專ラニシテ、濫リニ他人ヲシテ邪境ニ墮ツルコトヲ招カシム、哀ム可シ師タル者未ダ是ノ邪惡ヲ知ラズ、弟子何爲シテカ是非ヲ覺了センヤ云々

永祖の抱負は是くの如し、その當時不幸にして正師に會ひたまはざりしにあらず、永祖出世以前は未だ一人として正法を傳へ、正法を明らめ、正法を弘めた

るの正師なかりしとなり、實に傍若無人の獅子吼ならずや、又曰く

我朝高麗等、佛ノ正法未タ弘通セズ、何爲ゾ何爲ゾ、高麗國ハ猶正法ノ名ヲ聞ク我朝ハ未タ嘗テ聞クコトヲ得ズ、前來入唐ノ諸師皆教網ニ滯ルガ故ナリ、佛書ヲ傳フト雖モ佛法ヲ忘ル、ガ如シ、其益是レ何ゾ其功終ニ空シ、是レ乃チ學道ノ故實ヲ知ラザルガ所以ナリ、哀ム可シ徒ニ勞シテ一生ノ人身ヲ過スコトヲ云々

是れ大言壯語にあらず、永祖自信の脱體露現なり、果して然らば永祖所傳の正法とは何物ぞ、是れ人の聞かんと欲する所、予の述べんと欲する所のもの、左に永祖の直語實語を紹介せん（辨道話）

諸佛如來トモニ妙法ヲ單傳シテ阿耨菩提ヲ證スルニ最上無爲ノ妙術アリコレタダホトケ佛ニサツケテヨコシマナルコトナキハ自受用三昧ソノ標準ナリコトノ三昧ニ遊戯スルニ端坐參禪ヲ正門トセリ

法門無量ありと雖も正門は端坐參禪にあるがゆる又示して曰く

佛法ヲ住持セシ諸祖ナラビニ諸佛、トモニ自受用三昧ニ端坐依行スルヲソノ
開悟ノマサシキミチトセリ、西天東地サトリヲエシ人ソノ風ニシタガヘリ…
…宗門ノ正傳ニイハク、コノ單傳正眞ノ佛法ハ最上ノナカニ最上ナリ、參見
知識ノハジメヨリ、サラニ焼香禮拜念佛修懺看經ヲモチキズ、タダシ打坐シ
テ身心脱落スルコトヲエヨ、モシ人一時ナリトイフトモ三業ニ佛印ヲ標シ、
三昧ニ端坐スルトキ、遍法界ミナ佛印トナリ、盡虚空コトゴトクサトリトナ
ル云々

示シテイハク、大師釋尊マサシク得道ノ妙術ヲ正傳シ、マタ三世ノ如來トモ
ニ坐禪ヨリ得道セリ、コノユエニ正門ナルコトヲ傳ヘタルナリ、シカノミニ
アラズ西天東地ノ諸祖ミナ坐禪ヨリ得道セルナリ云々

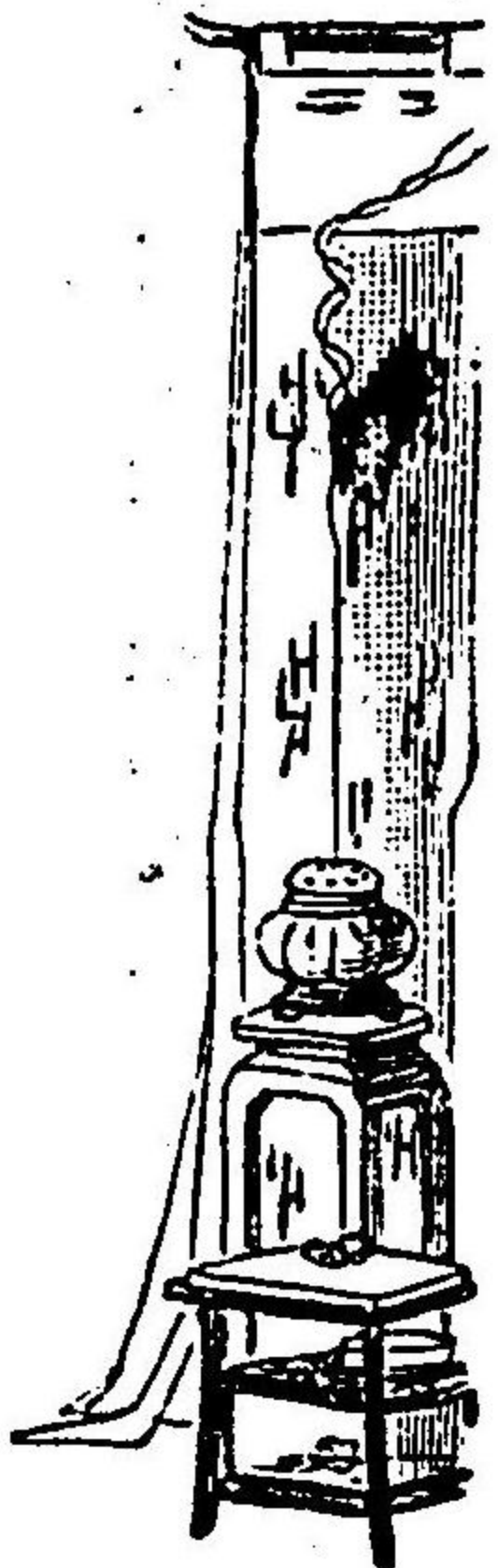
アルヒハ十二輪轉二十五有ノ境界トオモヒ、三乘五乘有佛無佛ノ見ツクルコ
トナシ、コノ知見ヲナラツテ佛法修行ノ正道トオモフベカラズ、シカアルヲ
イマハマサシク佛印ニヨリテ萬事ヲ放下シ一向ニ坐禪スルトキ、迷悟情量ノ

ホトリヲ超テ凡聖ノミチニ拘ラズ、速ニ格外ニ逍遙シ大菩提ヲ受用スルナリ
カノ文字ノ筌罟ニ拘ル者ノ肩ヲ並ブルニ及バンヤ…常ニ知ルベシコレハ佛
法ノ全道ナリ、並ベテイフベキ物ナシ

欽明用明ノ前後ヨリ秋方ノ佛法東漸スル、コレ便チ人ノ幸ナリ、シカアルヲ
名相事緣シゲク亂レテ修行ノ所ニワヅラフ云々

以上の祖訓によりて、永祖の正傳はまさしく佛法の全道たる坐禪三昧あること
明々白々たり、法門無量なりと雖も、その正門は自受用三昧なり、得道悟入の
方便門廣しと雖も、直指端的の要道は佛々祖々實踐躬行の王三昧に外ならず、
故に永祖はその坐禪儀に示して曰く、萬別千差といふと雖も祇管に參禪辨道す
べしと、永祖四世の祖師瑩山禪師此意を叙して曰く、萬行の中最勝の實行は只
是れ坐禪の一門なりと、之を學道の故實とす、之を悟道の妙術となす、之を
三寶の實歸となす、之を佛々の菩提となし祖々の三昧となす、永祖生涯の弘法
救生は此義を開演したまひしに外ならず、曹洞宗の今日ある、亦只此の正傳の

りしが故なり



(六) 我國佛教史上に於ける道元禪師の位置

鷲尾順敬

我國佛教史上に於ける、道元禪師の位置を説かんとするは、全く我國佛教界の一大高僧として其性行事業を顯揚せんとするものにして自ら曹洞の一宗門内より觀察するところと同じからざるところあらん、是れ寧ろ余の期するところなり、

我國史が鎌倉幕府開立の前後を以て二大分せらるゝかごとく、我國の佛教史も亦同じく二大分せらる、即ち我國の佛教の沿革を見るに、奈良朝平安朝は一

連の形勢をなし、鎌倉時代に入りて形勢一變せり、所謂鎌倉佛教は一の革新佛教あり、而して其革新佛教の眞精神を發揮して餘すところなきものは、道元禪師あり、禪師の性行事業、一々これを證すべし、極力平安佛教の弊害を排撃したるもの榮西日蓮あり、禪師は然かく饒舌ならず、然れども其性行事業は寧ろ彼等高僧の熱心なる言説に勝れるを見る、これ大に顯揚せざるべからず

- (一) 政治の權力を排したる事
- (二) 貴族の勢力を排したる事

奈良朝平安朝の佛教は、政治の權力に附隨し、貴族の勢力に附隨せり、奈良朝は政教一致なるか、平安朝の初、政教分離の方針を取りたれば、一たび佛教の位置を變動したるも、其實は佛教を弘通する僧侶の位置を變動したるものにして、佛教の興隆は全く前朝以來の精神を繼紹せるなり、換言すれば奈良朝の政教一致は、政治の權力僧侶に歸し、平安朝の政教分離は、佛教の勢力公卿に歸したるものなり、かゝる相異なるを以て、一見佛教の位置形勢大に相同しか

らざるが如くあるも、其實は全く一連の形勢をなせるなり、然れば奈良朝の末葉は僧侶の墮落によりて政教共に廢頽し、平安朝の末葉は公卿の墮落によりて政教共に廢頽したるもの、畢竟するに前後同一轍に出てたるものと謂ふへし、最初政教相關によりて佛教の興隆を致したるも、亦政教相關によりて廢頽を致すに至り、平安朝の末葉には如何にも收拾すべからざること、なれり、榮西日蓮等は佛教の廢頽を目撃して大に憤興し、極力勢力を挽回せんとしたるも、未だ十分に政教相關の大弊害を觀破せず、尙其精神を繼續せんとしたり、彼等高僧が奈良平安の舊思想を脱する能はざるものたるは、その興禪護國と言ひ、立正安國と云へる主張を以て證すべし、榮西禪師の性行事業を見れば、益其事實を明にするを得るなり、これ未だ其時到らざりしに由るは言ふまでもあし、日蓮上人は亦奈良平安の舊思想を受けたる事實あるも、京都に於ける來世佛教、鎌倉に於ける支那佛教の弊害あるを瞥見して感發したるところもあらん、これは自ら別問題あり、決して茲に榮西日蓮等の高僧を非議せんとするにあらず

然るに榮西日蓮等の性行事業を見たる後、道元禪師の性行事業を見れば、其顯著なる相異に驚かざるを得ず、就中榮西道元は共に佛心宗を傳へて一門を開立したるものにして、而も全くその態度を別にせり、鎌倉佛教の新思想開展達の順序は、榮西道元二禪師の性行事業の上に見はるゝなり、榮西禪師は平安佛教たる天台眞言の廢頽墮落を救濟し、新に佛心宗を開立せんとしたるものなるも、唯天台眞言宗に替ふるに佛心宗を以てしたるに似たり、その形式方法等は相同し、況や佛心宗と云ふも、圓密を并へ置きたるをや、道元禪師に至りては全然奈良平安佛教の形勢方法等を用ゐざるのみならず、極力これを排撃せり、禪師の眼中に政治の權力なく、貴族の勢力なし、禪師が佛教を弘通するにあたりて、些も是等の援助を借らんとするなく、全く禪師自身の道念に依り、着々として、効果を收めたるあり

道元禪師云く、それ佛法を國中に弘通すること、王勅をまつべしと雖、再び靈山の遺屬をおもへば、今百萬億刹に現出せる王公相將、皆共にかたしけなく

も佛勅を受けて夙生に佛法を護持する素懷を忘れず出來せるものなり、その化を敷くさかひ、何れの所か佛國土にあらざらん、この故に佛祖の道を流通せんに、必ずしも所をえらび、縁をまつべきにあらず、たゞ今日をはじめと思んや云云

榮西禪師が一宗の開立に勅許を得んとして、苦心經營したるに比して、其態度の相異せると驚くべきにあらずや

然れば我六十餘州は佛教弘通の土地にあらざるはあし、禪師は京畿北陸、東海縁に任せて經行弘通したるも、常に權勢の中心たる京師鎌倉俗累を厭ひ、これを避けたり、鎌倉へは最明寺時頼の強請により、一たび足跡を印したるも、時頼以下諸人の爲めに法門を説きて、後時頼大に抑留して一寺を興さんとしたるも、蒼皇辭し去り、越前の山中に飯隠し、高吟して曰ふ、今日飯山雲氣喜、愛山之愛甚於初と、以て其意を察すへきなり、弟子玄明が時頼より禪師に寄進せる六條堡二千石の寄進狀を受けて禪師に呈するにあたり、禪師大に喜はず

寄進狀を返附し且つ玄明を擯して其坐禪狀を毀たしめたりと云ふもの、禪師が權勢を惡めると蛇蝎の如くあるを見るべし

(三) 邊國の傳道を力めたる事

(四) 平民の傳道を力めたる事

奈良朝平安朝の佛教は京師佛教あり、貴族佛教あり、當時の高僧大徳は皆京師に於て佛教を弘通したれば天台興り眞言興れり固より當時京師は政治の中心學問の中心、文明の中心、何事も京師を中心とせざるなし、故に佛教が京師の地を出てさると異むにたらざるなり、然り而して佛教に京師を中心として興隆したるも、亦これかために沈滞したるなり、平安朝の末葉、京師は腐敗墮落の氣を以て充たされ、佛教亦渦中に陥りて沈滞極まれり、政權一たび鎌倉に遷りて、高僧大徳亦鎌倉に入りて佛教を弘通したり、榮西禪師の如く、先づ京師開宗事業を成さんとして失敗し、再び鎌倉に入り幕府の權力を借りて同じく其事業を成さんとして亦十分の功果なく日蓮上人の如き鎌倉に開宗事業を成さんと

して失敗せり、是等高僧の一時の失敗は、却て後年の基本をなしたるが如きも
最初其志に違したるは事實なり、然るに道元禪師に至りては京師鎌倉に開宗事
業を成さんすることなく、常に是等の二地に於て俗累の至らんとを恐れたり、
禪師支那より歸りて一たひ京師に入り、明全の舊菴に行李を卸したるも、決し
て京師に於て一門を開立せんとするなく、暫時にして深草に隠れ、夜雨の聲を
聞いて道念を養へり、後波多野氏の請あるにあたり、喜で北行し越前の山中に
入れり、吉祥山高からざるも、禪師の道風大に聳へり、其土地を中心となし、
漸次北陸諸國に佛教の蔓延を見る、禪師の志は京師鎌倉にあらずして山村僻地
にあり、松溪岡の奥、傘松の西、四來の道俗に接し諄々慈誨して倦まず、懇懃
の言平隱の文、一彼等を感じせざるなし而も後漢孝明の永平十年支那に傳はり
たる佛教東來して其山中にありとの意あるか、自ら永平寺と號し、開堂を行へり
これ實に禪師の抱負なるべし、然れば諸宗の間に曹洞の宗門を開立し、其高祖
として一宗門の下より仰がるゝがこときは、寧ろ禪師の期せざるところなるべ

し

(七) 門外漢の承陽大師

加藤 咄 堂

◎酒を嗜まざるものにして酒味を論じ、茶を喫せざるものにして茶味を評す
妄斷にあらずむば臆説のみ、予の洞宗に於ける殆んど此類、未だ其堂奥に達せ
ず、徒らに評論を門外に逞うす、笑ふものは笑へ、誹るものは誹れ、門外亦別
段の風流あり

◎冷やかに評し、明かに見る、門外却て門内に優るなきを得むや、廬山の眞
面目、豈に山中の老翁を待たむ、到得還り來て別事あきところ、峯となり巒と
なる趣致の存するあり

◎時勢英雄を生み、英雄時勢を制す、南都六宗の頽敗は傳教弘法の偉人を出
し、傳教弘法能く平安朝の心靈界を制す、台言の二宗勢力漸く變へて天下亂離
す、此時に當りて法然あり、親鸞あり、榮西あり日蓮あり、はたまた高祖承陽

◎大師のたまはく名利の爲めに佛法を修すべからず、果報を得んが爲めに佛法を修すべからず、靈験を得んが爲めに佛法を修すべからず、唯だ佛法の爲めに佛法を信すべきありと、これ大師が當年の佛教に一針を興へたまひしものにあらずや、大師の面目は實に此に在り

◎大師は顯門に生れたまひ、資縁する所を求めば何の資縁か結ばれざるべき然かも大師はすべてこれを卻けたまへり、大師の眼中たい佛法あるのみ、其他には何物を求めたまはざりしかり

◎急流石に激して水玉を吐く如きものは日蓮上人の布教なりしならむ、英雄は瀑布の如し、能く道なきに道を造る然かも大師は此花々しき英雄を學びたまはざりし

◎春雨しめやかに降る深草の庵、桃李言はず自ら蹊を成しき、山深き志比の里、雲袂雲の如くに集りき、木の葉の下を流るゝ水の終に大河となるが如く、大師の家風は枯淡簡朴、しかも門下一万四千の寺院を有したまふに至りぬ

大師は出でたまひしなり

◎親鸞は時勢の潮流を看取して能く教を北越と關東に布き日蓮は時勢に逆行して能く關東を制す、親鸞日蓮は偉人なり、其親鸞を出したまひし法然上人も偉人なり、而して我が高祖承陽大師を出したまひし榮西禪師も偉人たる也

◎鎌倉山の星月夜、我が教界は多くの偉人を出しぬ、俗人らしきあり、政治家らしきあり、肉食妻帯を初めたまひしあり、立正安國を唱へたまひしあり、然れども宗教家らしき宗教家は誰ぞ、佛教の爲めに佛法を修したまへるは誰ぞ門外漢の眼には獨り承陽大師の映するのみ

◎大師の出家も學道も求法も布教もたいこれ佛法の爲めに佛法を修め佛法の爲めに佛法を弘めたまへるのみ、大師は勤王家なりしならむ、されど大師を強て勤王家なりといふは大師の好みたまふ所にあらず、大師は國家主義の人ありしならむ、されど大師を強て國家主義の人ありといふは大師の希ひたまふ所にあらず、大師は唯だ佛法の爲めに佛法を舉揚したまひしなり

(八) 嗚呼老梅樹

忽滑谷快天

嗚呼、老梅樹、老梅樹

瀟灑たる仙姿、我心を得たる哉、清楚たる其香を以て我心を澄ましむべく、傲岸なる老幹は以て我志を牢からしむべく、瑤蕊碧蒂、芳を聯ねたるは以て我節を清くすべし

嗚呼、老梅樹！

汝ち詎そ我宗風に肖たるの酷しきや、われ汝ちを愛する所以實にこゝにあり試に眼を轉じて教界の花園に其美を競ひつゝある汝ちが花友を評せんか

事理圓融帝網重々にして十玄六相鮮やかに開けるは、かの春風駘蕩の曉、八重櫻の艶に麗はしく咲き満ちたるに似たらすや、されど吾之を視れば其艶なる所却て俗に、其麗なる所却て卑しむべし、争て我老梅瀟灑たるに如んや

教觀の二門いみしう高くして、十乗の月獨り天に冴ね、三諦妙融の白蓮に映したる、皎潔誰か能く之に及ばん、されど吾之を觀れば其皎たり亮たる所、自ら寂寥の感なくんばあらず、いかで我老梅の初春に匂ふか如くならんや
むげに塵世に背きて淨土の莊嚴を憬憧し、阿彌陀佛の御恵みに只管ら涙を流す所、露を帯ひたる海棠の嬌態に似たらすや、されど吾之を觀れば其嬌姿媚態自ら悲哀の相を免れず、争て我老梅の幹莖共に剛健なるに如んや
五位百法の談、三界を心ろ一つにこめて恰も深き思ひに染みたる處女子か天桃の色に見入りたるに似たり、されど吾之を見れば其愛すべき紅ゐの花は徒らに褪め易きを奈何にせん争て我老梅の氣節高きに如んや
天地の間全智全能の主宰に一任して唯一なる眞神の教へに歸したる所、恰も異つ國より移し植たる薔薇の花、いと大いなる一輪、緑りの髪に挿れたるか如し、されど吾之を見れば純は則ち純ありと雖も未た凡庸なるの譏りを免れず、焉んぞ我老梅と芳を競ふへけんや

此他濃き紫に匂ひ、金の色を輝かし、あるは紅み深く染め、あるは白雪の肌清く、あるは琉璃なす空の色を表はし、燦爛として教界の花壇に妖艶を競ふ者、擧て數ふへからず、されど吾之を見れば多くは皆干草の花、童男童女の弄ひくさになりなん、未だ以て丈夫の賞觀を價ひするものなし、是吾ひとり老梅を愛する所以實にこゝにありて存す。

嗚呼、老梅樹、老梅樹！

爾ち何ぞ我祖師に似たる、吉峰の雪と其白きを争ひたる祖師の高操は吾欽慕措く能はざる所なり、傘松の明月と其光を争ひたる正傳の宗風は吾朝暮に鑽仰して止まざる所なり、實に祖師は老梅樹なりけり、櫻花の婉婉は則ち未だし、新柳の嫵々はその質にあらず、されば權門の嚴氷に其節を折らず、縉紳の歸依隨かなる都の春に咲かすして、越州の山深き所、白雲を衣とし流水に心を洗ひて

谿乃晝聲夜聲落、便宜于運水

山乃春色秋色得、便宜于搬柴

となし給ひ、宏智の所謂

山上下吞佛語

溪東溪西牧牛歌

を樂しみ給ひければ、千林果實を拾ひては大梅の古へを偲ひ、耕雲種月幾度か地藏の遺風に安んじ給ふ、是を以て

殘摧枯木倚寒林

幾度逢春不變心

樵客見之猶不顧

野人何得苦追尋

てふ名偈は祖師の操守を描き出して餘蘊なし、是豈老梅の素朴にして高雅なる本領にあらずや

思ふにそれ祖師が我等兒孫を憐み給ひて諄々として教を垂れ給ふ温かき恵みの中、威風凜凜として犯すべからざるものあるは、恰も孟春の晨、東風漸く暄かあれど、猶ほ嚴霜の白きを踏む梅花の候に似たらずや

且つ高祖師はいみしう麗はしき情操を備へ給ひたれば、彫琢を加へずして自

ら金玉の文字をなし給へり、さればにや、其文あり章ある所、燦として鳳鸞の空に舞ふが如く、聲あり調ある所、鏘々として琴瑟を鼓するが如く、色あり彩ある所、藤紫躑紅を列ねたるが如く、悠たり裕たり、春海洋々、典雅嵩高、芙蓉の峰高く聳ゆ、これは是祖師が心の花にして吾拈弄擱く能はざる所あり

然りと雖も祖師は徒らに辭に花を飾りて七重八重山吹の咲きこぼるゝが如くならず、莊重にして摯實を旨とし給へば、所謂如語者實語者にてましくき、是豈花質雙ひ具ふる者にあらずや

加之、祖師が法身の馨香遠く万世に薫して普ねく天下人の衣を襲ふあり、是豈祖師が氷肌玉骨の天真より流露し來る餘澤にあらずや

嗚呼、老梅樹、老梅樹！

我門の家風備ちに一任す、靈山の枯花は是老梅の笑ひあり正法の唱へは是黃鳥の歌ひあり、是を以て祖師のたまはく「梅花の五葉は三百六十餘會なり」と況や少林の胡僧は三周の寒暑を経て一華五葉の春を現せしぞや、矧んや禮拜得

髓の人は其臂を断ちて嵩山の雪を紅の花に化したるをや、敢て問ふ、嶺南の能者は八月の槽廠に黃海の衣を傳へしにあらずや、我祖の神丹に入る大梅の一枝何人より感得し給ひつる、嗚呼、祖師真訣の椽花綾、綿々として長きこと幾何

嗚呼、老梅樹、老梅樹！

銀燭綠酒、其觴を蕩かす者はこれあり、備か清香に氣節を高うする人果して幾何ぞ、爛熳たる櫻花の下、蝶舞蜂歌、色に狂ひ香にあこがるゝ者はこれあり、備を白雪の間に探りて其苦節を賞する人果して幾何ぞ、柵鬢風に梳りて嬾々長く垂る所、新婦を携へて従容する者はこれあり、備か瑤蕊に接せんが爲めに寒風膚を刺すを忘るゝ人果して幾何ぞ、宋玉昔し楚王に語りて曰く「客郢中に歌ふ者あり、其始めを下俚巴人と云ふ、鬪中屬して和する者數千人、其陽歌雍露たるや、國中和する者數百人、其白雪陽春たるや、國中屬して和する者數十人のみ」と、然り、大聲は俚耳に入らず、倉祿を斥けて享けず、紫衣を擲て用ひ

ざる高祖の宗風は俗客の容易に解する能はざるも亦理りなりけり

嗚呼、老梅樹、老梅樹！

祖門の春色今將た如何、縁りつやます千草の色！、我家の兒孫も亦斯くの如く萌え出てつゝあるか、玉龍箠を脱く琅玕の林！、我家の麒麟兒も亦斯くの如く傑出しつゝあるか、喙たり唳たり黃鸝の聲！、我家の福音も亦斯くの如く歌はれつゝあるか、心せよ、我親愛ある道友、心せよ、憐家の櫻桃は漸く時めき來りて我家の老梅は將に地に萎し去らんとす

嗚呼悠なる哉悠なる哉我祖の徳、悠なる哉悠なる哉老梅樹！、謂

ふことを見すや

老梅樹兮老梅樹

万木叢中稱獨尊

穿破天童鼻孔去

尙留花氣薰兒孫

雪裏の梅終

本篇に載する處のものは、我等隨意に筆を執りたるを、其題號に隨ひて編輯したるものなれば、大師の性行事業を各自分擔して書きたるものと違ひ、其間に統一なきは勿論の事であり、隨て引證等にも互に同一の處ある等不体裁極るものであります、大師の片影は之に依りて幾分捉へられたるは信じて疑はざる處であります、特に先輩諸賢の玉稿を得て我等の言足らざる點を補ふ事を得たのは、獨り我等の喜びばかりではなからふと信じます

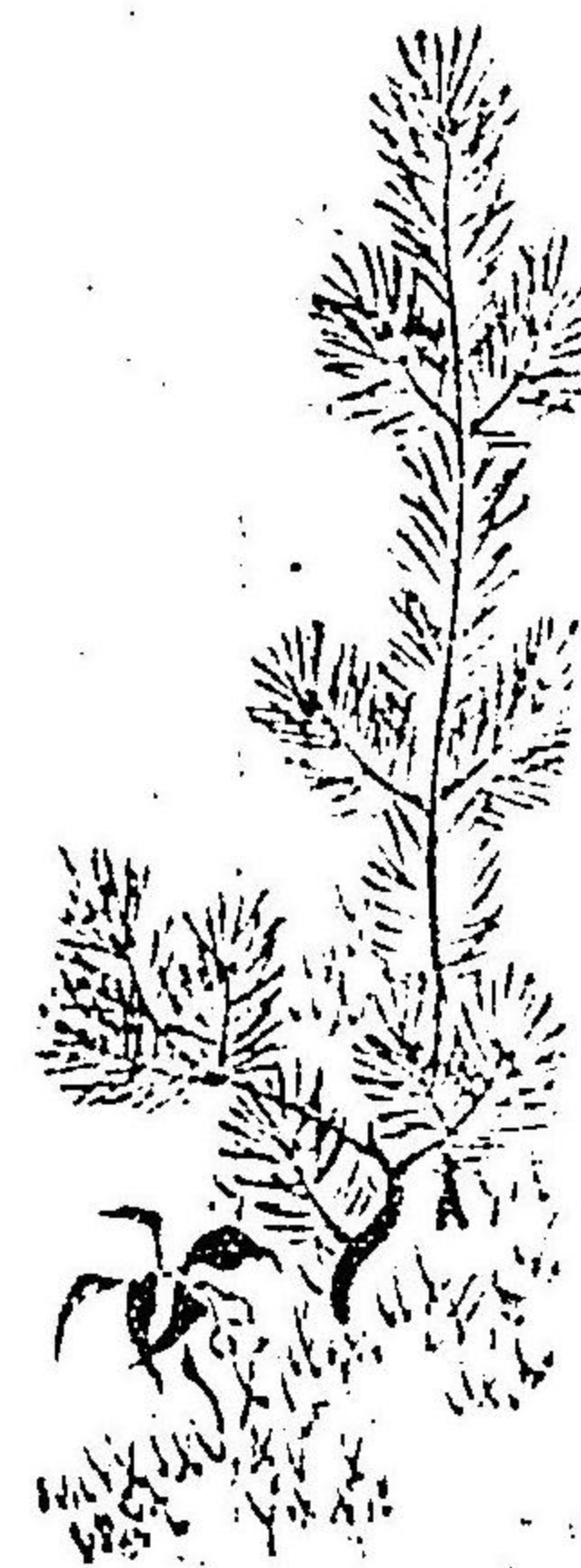
明治三十六年一月二十三日 印刷
明治三十六年二月 七日 發行

編輯者兼 發行者 祥雲 晚成

印刷者 桐村 覺 豐

發行所 東京麻布北日下窪町四十三番地
曹洞宗 青年會

不許複製



.....

特45

26

雪裏の梅

国立国会図書館

019576-000-4

特45-26

雪裏の梅

曹洞宗青年会

M36.2

ABG-0350



